【エッセイ】

詫びる？詫びない？日本人

――日本語雑記・七――

工藤力男

謝罪行為と日本人

日本人は簡単にあやまる民族だと言われる。電車で吊革を握ろうとして他人の手に触れてはあやまり、雨傘の雫が他の乗客の靴に垂れるとあやまり、座席を譲ってもらうと「すみません」と言う人が多い。どうも、日本人はすぐにあやまる民族であるらしい。

外国で自動車を運転して他人の自動車と接触するなどのことがあって、つい先にあやまったために、先方に非があったのに、その後の交渉で大損したというたぐいの話もいくつか見聞きした。だが、その確かな出どころはほとんど記憶していない。わずかに本多勝一さんの本にあったことだけは覚えていたので、『アラビア遊牧民』を繰ってみた。すると、「ベドウィンの方が普遍的で、日本人こそ特殊なのだ」の章にそれはあった。リヤドのホテルでの経験から始めたくだりで、過失で皿を割ったら、日本人なら「まことにすみません」あるいは「わたしの責任です」などと付け加えるだろうとして話を進めている。

世界の主な国で、皿を割って直ちにあやまる習性があるところは、まことに少ない。「私の責任です」などとまでいってしまうお人好しは、まずほとんどない。日本とアラビアとを正反対の両極とすると、ヨーロッパ諸国は真ん中よりもずっとアラビア寄りである。

（朝日新聞社刊　文庫版　p.153）

本稿の読者諸賢も、おそらく同様の感想、すなわち日本人はすぐにあやまる傾向があると思っているのではないだろうか。また、いくつかの外国に旅した経験のある人なら、立場が変わったばあい、外国人はなかなかあやまらないという認識をもっているに違いない。これは文化人類学の恰好の話題であるが、本稿の関心は別のところにある。

国立国語研究所編集の冊子、〈新「ことば」シリーズ17〉『言葉の「正しさ」とは何か』（2004.3）の後半の三十数ページは「言葉に関する問答集」で、十八の質問と回答がのっている。その中の問14を掲げる。

人に謝るとき、よく「おわびします」とだけ言ったり書いたりしているのに出会います。

右はその質問の前半であるが、この質問者は何が問いたいのだろう。ここまで読んだとき、わたしは、この人は外国人なのかと思った。人に詫びるとき、「おわびします」というのは当然のことだからである。だが、質問は続く。

「すみません」「ごめんなさい」などの言葉がないと、きちんと謝ったことにならないような気がするのですが、どのように考えたらいいのでしょうか。

質問者は外国人ではないらしいが、日本人にもこのような疑問を抱く人がいるのだ。言語意識が変わってきたのだろうか。

本多さんはすぐにあやまると言い、右の質問者はあやまらないと捉えているようだ。本稿ではこのずれについて考える。なお、現代日本語の謝罪行為を意味する動詞「あやまる」と「わびる」は同義語だといえる。右の引用にも両語がみえるが、ここでは、この二語の歴史、意味の違い、文体差などの議論はしない。標題には簡潔な「詫びる」を用いたが、本文中ではおおむね「あやまる」を用いることにする。

本稿での紀年はキリスト暦により、日付は、（2000.10.20）のように括弧書きすることがある。

日本語動詞の一類

動詞の分類法はいろいろある。ここではテンスとモダリティーの側から考える。

来週の海水浴、わたしも行く。

三十分もすれば、次の電車が来る。

庭の桜の木、今年はきっといい花が咲く。

右に掲げた作例の文末に用いた動詞はいわゆる基本形であるが、すべて未来の事態を表現している。第一例でいうと、実際には「行かなかった」ということは、いくらもありうる。母語の話者は、そんなことを意識せずに日常の言語生活を営んでいる。右の三例に用いた動詞「行く、来る、咲く」はいずれも動作や作用を表わす。

一方、動詞の基本形が現在を表現することがある。

この件については僕もそう思う。

食べすぎで胸がむかむかする。

お前のおこる気持ちよくわかる。

右の作例で、主文の動詞は思考・知覚・認識などを表現し、いずれも現在の事態を述べている。「痛む、聞こえる」など、話し手の内部感覚に基づいて述べる無意思の自動詞もこれに相当する。これらをまとめて〔認識動詞〕と仮称しておく。

基本形が現在の事態を表現する動詞はほかに、存在を表わす「ある」類、能力を表わす「できる」類、関係を表わす「属する」などもある。先の「行く」類の動詞の基本形が未来の事態を表現することと合せて、基本形を〔現在未来形〕と呼ぶこともある。

認識動詞に近いふるまいを見せる動詞に、発言を表わす動詞の内容がそのまま行為になるものがある。

一万円貸してくれ、頼む。

ここに大会の開会を宣言する。

みんなが平穏に暮らせるように祈ります。

「頼む」と発言したことによって頼む行為が実現しているのであり、「宣言する」「祈る」についても同様である。主文の述語動詞として用いると、発言がそのまま行為の遂行になるという意味で、「発言動詞」「言表動詞」などと呼ばれ、〔遂行動詞〕（英 performative verb）の称もある。本稿ではこれを用いる。このたぐいは、「信ずる、願う、呪う、誓う、詫びる、感謝する、歓迎する、祝う、断わる、約束する、期待する、命ずる、忠告する、許可する、任命する」など、かなり多くの動詞がある。当然いずれも意思動詞である。

これらの動詞は、例えば、宿泊施設の宣伝で「特に団体でのご利用を歓迎します」と用いるばあいは普通の動作動詞であるが、到着した団体客を前に「心から歓迎します」というときは、遂行動詞として機能していることになる。この類を特に〔遂行動詞〕として取りたてるのは、あくま

でも発話時点で話し手の表現態度（モダリティー）を表現する点に着目しての処置である。

遂行と願望

近年、遂行動詞と願望表現の結びついた文章が目につく。日刊新聞の一日分を注意深く読んだら、三つ四つは必ず拾うことができるだろう。手はじめに、インドネシアの大統領選挙に因む朝日新聞の社説（2009.7.12）から引き、傍線をつけて掲げる。

①世界最大のイスラム人口を抱える国の民主主義が、安定期に入りつつあることを歓迎したい。

②経済を成長軌道に乗せるには、投資環境やインフラ整備など多くの課題が残る。ユドヨノ氏の堅実な手腕に期待したい。

「歓迎する」も「期待する」も、そう発言することによってその行為が完了する遂行動詞である。したがって、あえて「たい」をつける必要のないものである。

願望にはさまざまの段階がある。家族で食堂に入って食べたいものを告げるのに、「わたし、刺身が食べたい」というとき、実現の不可能性を疑う必要は全くない。だから、あえて願望の形をとらぬ「ボクはウナギだ」だけで十分に意図を伝えることができるのである。それに対して、萩原朔太郎が「ふらんすへ行きたしと思へども／ふらんすはあまりに遠し／せめて新しき背広をきて／きままなる旅にいでてみん。」（『純情小曲集』所収「旅上」）と歌ったとき、彼がフランスへ行く可能性は極めて小さかった。実現が難しいことだから、あえて「行きたし」と言う意味があるのであって、詩歌における願望表現は、おおむねそういうものなのだと思う。

遂行動詞「歓迎する」「期待する」と発言することには何も難しいことはない。それなのに、あえて「たい」をつけた表現を好む日本人がいるのである。そういう見通しのもとに朝日新聞からの用例を加えよう。

③鳩山政権に期待を込めてこの言葉を贈りたい。「首相の指導力でスー・チーさんを解放してください」。（2009.9.20）

④内心では、横浜地裁の決定と総括に安堵（あんど）していると信じたい。（2010.2.7）

⑤２０１３年ごろ開かれる外交会議を日本に招致し「水俣条約」と名付け、水銀汚染防止への取り組み

を世界に誓いたい。（2010.5.2）

③は在外記者の発言を実名入りで載せる「風」欄の末尾、④は横浜事件に関する社説である。⑤は水俣病犠牲者慰霊式における鳩山首相の「祈りの言葉」の要約で、原文は定かでないが、この叮嚀すぎる話しぶりは、原文どおりである蓋然性が大きいと思う。

⑤に類するものとして⑥を見ておこう。時事通信のネット配信記事である。

⑥福田康夫首相は12日夜、政府・与党が後期高齢者医療制度（長寿医療制度）の運用改善策を決めたことに関し、「高齢者の方々の気持ちを心ならずも傷つけた。率直におわび申し上げたい」と陳謝した。（2008.6.12）

傍線部は福田首相の言葉どおりとおぼしい。「おわび申し上げたい」は願望表現で、まだ陳謝してはいないことになる。そこで、改めて「陳謝した」と書くのだろう。日ごろこのような日本語に頻繁に接していたら、最初の節に紹介した質問を発するに至るのも無理もないことである。

「期待したい」

《遂行動詞＋たい》の表現はいつごろから盛んになったのだろう。わたしが気にかけ始めたのは三年ほど前だが、手元の控えでは二年前のものが一番古い。ところが、『岩波国語辞典』第七版（2009）は「期待」の項でこう補足説明している。

「―する」と言い切って済む文末を「―したい。」と言うことが一九九五年ごろから好まれだした。

辞書編纂者としては当然の目配りなのかもしれないが、よくぞ気づいたものだ。それにしても、十五年ほど前にどんな事情からこの表現が広がったのか、とんと見当がつかぬ。少しさかのぼって新聞にその類を探してみよう。いずれも朝日新聞の社説からである。初めに「ベトナム　新指導部で改革加速を」と題する社説（2001.9.24）から引いて、括弧内にわたしの言葉を補う。

⑦新指導部の下で市場経済化へ向けた動きが加速されることを期待したい。

⑧（ホー・チ・ミンの遺書を引いて）その呼びかけをベトナムの人々は忘れたわけではない、と信じたい。

⑨民主化は、いつかは踏出さなければならない道であ

り、将来に向けてベトナムの新指導部がどういう布石を打つか注視したい。

⑨の「注視する」は遂行動詞とはいえないが、この短い社説の中に、願望の「たい」で終わる文が三つもあるのである。よほど「たい」が好きなのだろう。

以下、「期待したい」の例を少々、社説の論題を添えて引く。

⑩［地球温暖化］各国の世論が、それぞれの国の政府の背中を押し、米国の姿勢を変えさせることを期待したい。（2001.4.1）

⑪［命の値段］医療過誤訴訟や公害裁判などでの賠償金の算定にも、同様の考え方が広がることを期待したい。（2001.4.19）

⑫［日銀短観］むろん補助金のバラマキはできないから、知恵を出す「賢い政府」としての役割に期待したい。（2010.7.3）

⑬［来年度予算］人気取りのパフォーマンスで終らないよう、政府の優先順位を決めるのにふさわしい手法を編み出すことを期待したい。（2010.7.28）

「期待したい」、換言すると《遂行動詞＋たい》がかくも好まれるのはなぜだろう。新聞に見えるこの型式は、前節で見たように論説・主張中であって、単なる報道記事にはまず見ないといってよい。ということは、記者・論説委員が、遂行動詞による主張の直接的な表現を避けて、願望の「たい」をつけてぼかしたのだと言えよう。

本稿のまとめの作業中にエジプトで政変が起こった。ネット配信で読んだ朝日新聞二月十三日の社説〔エジプト革命―自由と民主主義の浸透を〕は次の文で結ばれている。

民主化に抵抗し、権力にしがみついたムバラク大統領の見苦しい姿は、中東の指導者たちに、直ちに民主化にとりかからねばならぬという教訓を与えたと期待したい。

上引『岩波国語辞典』の「期待」の項、二分された語義記述の後者には、「将来それが実現するように待ち構えること。」とある。過去形「与えた」で表現された事態を期待することができるものだろうか。

これらが、新聞社の主張なら強い表現を用いるべきなのに、そういう表現はしていない。かかる表現に、わたしは〔朦朧体〕の名称を進呈しよう。

朦朧体の広がり

〔朦朧体〕が新聞の主張に多いことは確かだが、決してそれの独占というわけではない。この手の表現を他の文章から拾ってみよう。初めはやはり朝日新聞からで、筆著名を記すこともある。

不要なワクチン接種といたずらな勧奨をしないことと、接種後の副反応調査、幅広い被害補償を、国に求めたい。（2007.10.11「私の視点」母里啓子稿）

埼玉での試みがモデルとなり、各地で「地域支え合い」が広がることを期待したい。（2009.9.26「私の視点」上田清司稿）

理科系出身の総理、副総理、文部科学大臣に、初等理科教育予算の充実を訴えたい。（2010.5.9　教育欄　小森栄治稿）

読者の発言にも見える。

一緒に日本に来たその夫たちが、夫婦のきずなを大切にするのに感動した。妻と共に暮らす日本での幸せを祈りたい。（2010.2.10　テレビ欄「はがき通信」）

日本をよくしようという心根だろう。大いに期待したい。（2010.4.10　新党「たちあがれ日本」結党についての感想）

中村俊輔の復活期待したい（2010.8.1　中部本社版「声」欄の一篇の標題）

最後の例は、投書の原稿にはなかった標題を編集部でつけたのかもしれない。

言語の学や文筆を業とする人の文章にもよく見る。

まずは新たな小説的才能の出現を喜びたい。（朝日新聞　2008.11.2　書評欄　奥泉光稿）

音声学の講義内容を文字化した本書の出版を歓迎したい。（『言語』2008.11　書評欄　南條健助稿）

掌編集であるゆえに味わえる、濃厚に凝縮した世界の久々の登場をまずは祝福したい。（朝日新聞　2010.5.9　書評欄　田中貴子稿）

グローバルな視野からの総合的研究が、より一層推進されることを望みたい。（中略）そのような研究も進展しつつあることを喜びたい。（『日本語の研究』第六巻三号　2010.7　高橋久子稿）

場を設けご意見いただいた狩俣繁久教授（中略）、そして匿名の査読者に感謝したい。（同右第六巻四号　2010.10　衣畑知秀・岩田美穂稿）

厳密な意味での口頭語ではないかもしれないが、ラジオのニュース報道の例を二つあげよう。初めは、トヨタ自動車が米国で実施したプリウスのリコール問題に関するもので、社長の挨拶を引いて次のように結んだ。

信頼回復に努めたい、と語りました。（2010.2.10　七時）

次は、ある中学校の合宿研修中、悪天候下のボート訓練で生徒が一人亡くなった事故の報道で、学校長の発言を報ずるものである。

「謝罪したい」とおわびしました。（2010.6.21　正午前）

「謝罪する」を願望の「たい」で和らげておいて、それを「わびる」で補強した感じで、ほとんど同義語のくりかえしに近い。

強かるべき主張なのに、それをつい和らげてしまうところが日本人らしさなのだろう。冒頭に引いた、本多さんの記述が思いだされる。

遂行動詞は要注意！

認識動詞を含む遂行動詞には、案外気づかれない性質がある。先に見たように、現在未来形で文を終止するだけで、話し手の意図が実現したことになる。発話時点での話し手の態度、すなわち〔モダリティー〕が発現するのである。

わたしの住む地域に来るチリ紙交換車は、録音した宣伝文を拡声器から流して回る。次に掲げるのは、古紙類があったら知らせよ、という文言の終りである。

お知らせくださいますようにご連絡申しあげております。

わたしはこれに違和感をおぼえる。「お知らせください」で十分なのに「ますようにご連絡申しあげる」を加え、さらに「ており」まで添えたことによるようだ。これでは、宣伝車とは別の車が交換に回っているような感じがする。むろん、車は一台しか来ない。

小泉保『日本語教師のための言語学入門』（大修館書店 1993）の「語用論」の章の遂行動詞の項に、「その出現する位置が定められている。」としたうえで、次のような説明がある（原文は横組み）。

主語は1人称（ママ）の話し手、与格目的語は2人称（ママ）の聞き手、対格目的語は話される内容（いわゆる文）で、遂行動詞は常に能動の現在形（発話時）となる。（p.334）

そして、日本国の旅券の頭初の表現を例にしている。少し

長いが具体的で平明なので借用する。

また、旅券の頭初には、「日本国民である本旅券の所持人を通路故障なく旅行させ、かつ、同人に必要な保護扶助を与えられるよう、関係諸官に要請する」と書きこまれているが、第三者の日本国外務大臣が「要請する」形式をとっている。

さらに、上の述語動詞「要請する」を進行形や過去形に改めると、遂行動詞の資格を失ってしまう。

(2)関係の諸官に要請している（ことを伝える）

(3)関係の諸官に要請した（ことを伝える）

のように、遂行動詞「伝える」が裏面に隠れていると考えなければならない。

(2)は、まさにチリ紙交換車のアナウンスである。進行形にしたために、話し手自身の発話行為としてではなく、客観的な事象の表現に変じたのである。年賀状の決まり文句を叮嚀にしすぎて「謹んで新年のお喜びを申し上げております」としたら、やはりおかしいのだ。

モダリティーに関して補足する。病気の母親について娘が話す文を作ってみた。

A　母はなおらないと思います。

B　母はなおらないと思っています。

文中の思う人が、Aでは娘であることは動かない。Bでは母親と解釈するほうが自然であろう。Aは、「思います」の現在未来形によって発話時点における話し手の意図が表現できた。だがBは、「ている」を添えたためにぼやけてしまった。上引の(2)やチリ紙交換車の宣伝に似ているのは当然である。なお、遂行動詞に「ている」をつけた進行形は、例えば「あなたの幸せを祈っています」のように、発話時点を含む未来に続く行為を表現することもある。

願望は、実現しがたいときに特に用いられることが多いむねを先に書いた。遂行動詞の願望表現では、実現の不可能性はさらに強まる。

このたびの遭難は夢であったと思いたい。

うちの娘に限ってそんなことはないと信じたい。

これらは、むしろ反事実の願望というべきであろう。

古代、願望の助詞「なむ」があった。萬葉集の巻第十六、三人の男性に懸想されて悩んだ末に池に身を投じて果てた縵児（かずらこ）を悼んで三人が歌を詠んだ。その一。

耳無（みみなし）の池し恨めし我妹子（わぎもこ）が来つつ潜（かづ）かば水は涸れなむ

新編日本古典文学全集の『萬葉集』は、「耳無の池は　恨

めしいぞ　あの娘が　来て沈んだ時　水が干てくれたらよかたのに」と訳している。なるほど願望の表現に違いはないが、過去に実現しなかったこととしての詠なのである。

表現を和らげる「たい」の使用には留意せざるべからず、わたしはそう思いたい。

新聞の日本語再考

以前、言語時評「誰が保存せしマンモスの脳」（拙著『かなしき日本語』に再録）で書いたことだが、現代日本語では、「同調から融合へと発展的に解消されて」のように、無意味な「られる」による「虚の受身」が好まれることを指摘した。《遂行動詞＋たい》はその異母兄弟とでも言えると思うのだが、新聞はこの「られる」も大好きである。

朝日新聞の社説だけからでも同類は簡単に見つかる。昨年七月分だけで三例ある。

［二重課税訴訟］そんな問題意識をもって税調全体を点検する作業が求められよう。（2010.7.8）

［一票の格差］そうした大掛かりな作業を進めるなかで、投票価値の平等の問題にも迫っていく知恵が求められる。（2010.7.15）

［地デジあと1年］普及率の調査は今秋、来春にもくり返しておこなわれる予定だ。その結果を見ながら、移行策の強化などで柔軟に対応することが求められる。（2010.7.27）

なぜ「を求める」と書かないのだろう。この柔弱な日本語表現は、先の大戦中、虚勢を張った誇大表現で戦争意欲の煽動にこれ努めた新聞の文章とは大違いである。もしかしたら罪滅ぼしなのだろうか。新聞の文章に必要なのは、正確で達意簡明な表現のはずなのに。

そう考えるわたしは、ここでもまた高島俊男さんに出あった。『本が好き、悪口言うのはもっと好き』（文春文庫）の「新聞醜悪録」の「望まれる」の節で、高島さんは某紙のコラム「窓―論説委員室から」を取りあげている。編集委員《井》の「特定の事業のために全体のまちづくり審議会が影響を受けた、との疑念が起きないよう、細心の配慮が望まれる。」を引き、次の文章で結んでいる。

イヤな言いかただ。《井》論説委員が望むのなら、「細心の配慮を望む」と言えばよい。論説委員全体が望むのなら、「われわれは細心の注意を望む」と言え

ばよい。この言い方は、曖昧、かつ気持がわるい。注文はつけるが、注文をつけた責任はとらないよ、というつもりか。

こういう文章を見てわたしが感じるのは、何より、不潔感である。

まさに我が意を得たりの思いがする。

（二千十一年三月）

前稿の訂正　前号に掲載された「受診と聴取」の誤りを訂正します。

《位置》	《誤》	《正》
87ページ下段9行	ロ前大統領	廬前大統領
89ページ下段19行	らしいなのだ	らしい